

あったものは3検体あり疑陰性率は10.0%であった。

【まとめ】細胞診判定結果から、病理組織診断結果においての正診率はClass IIが低値であった。またClass IV及びVは高値であった。

細胞診の精度は感度が90.0%あり有用性が示唆されたが、Class II以下の診断となった症例であっても病理組織診断にて10%は悪性腫瘍を認めたことから、その扱いには十分な配慮が必要である。

【結語】今回われわれは、口腔粘膜疾患に対する細胞診検体を解析し、内訳および有用性について検討を行ったので、その概要を報告した。

### 13) 常温重合レジンの操作環境が曲げ強さと弾性係数に及ぼす影響について

○大木 達也, 齋藤 龍一, 石田 喜紀  
岡田 英俊  
(奥羽大・歯・生体材料)

【目的】主に支台歯形成後に暫間的に使用されるテンポラリークラウン (TeC) であるが、脱離や破損が起こることは少なくない。また、TeCを成形後に温水中で保管することにより、重合反応を促進させることがよく行われる。しかし、それらの手技における方法と常温重合レジンの物性について明らかにした報告は認められない。

そこで、2種の常温重合レジンについて、成形後の保管温度とその時間が曲げ強さと弾性係数に及ぼす影響を調査することで、チェアサイドでの適切な操作方法を検討した。

【材料および方法】今回使用したレジンではテンプロン (ジーシー) およびキュアグレース (トクヤマ) の2種類である。粉液比 (P/L) は2.0, 混和時間はテンプロンが30秒, キュアグレースは15秒と設定した。条件として、保管温度を37℃, 50℃および90℃と設定し、保管時間はそれぞれ1・2分とし、各条件につき2mm × 2mm × 25mmの試料を10個作製した。

作製開始から20分経過後、小型万能試験機にて支点間距離20mm, クロスヘッドスピード0.5mm/minで3点曲げ試験を行い、荷重とたわみ量を計測し、曲げ強さと弾性係数を算出した。

また、試験時の試料破断の割合を調査した。

【結果および考察】どちらの材料においても保管する温度が高くなる程、またその時間が長くなる程、曲げ強さおよび弾性係数の値は高くなった。また、試験時の破断の割合に関して、キュアグレースにおいて50℃では2分で10%, 90℃では1・2分ともに100%破断した。テンプロンにおいては50℃では2分で10%, 90℃では1・2分ともに40%が破断した。

この結果から90℃での保管条件で曲げ強さと弾性係数の値が高くなったのは、重合開始剤であるBPOの活性化温度が60℃であることから、重合度が向上したためであると考えられる。

【結論】2種の常温重合レジンにおいて、成形後に保管する温水の温度が高く、またその時間が長いほど、曲げ強さと弾性係数は大きくなることが明らかとなった。

しかし、90℃の温水で保管した試料は試験中に破断する割合が高くなったことから、レジンを高温水中で保管する場合には咬合関係の調整に留意することが必要であると示唆された。

### 14) チタン製アバットメントの変形を生じたインプラント症例

○井ノ上靖尊, 船川 竜生, 兼島 靖彦  
関根 秀志  
(奥羽大・歯・歯科補綴)

【緒言】一般にインプラント補綴装置はインプラント体, アバットメント, 上部構造の3部品にて構成されている。従来より、チタン合金製の既成アバットメントは、広く臨床応用されており高い効果が確認されている。このたび、下顎大白歯部に適用したアバットメントが暫間上部構造装着直後、チタン合金製アバットメントの変形を伴う不具合を経験したのでその概要を報告するとともに原因と再発防止策を考察した。

#### 【症例概要】

現病歴：H25年頃重度齶蝕にて下顎左側第一大臼歯を近歯科医院にて抜歯したが放置。当該歯の欠損による咀嚼困難を主訴とし精査加療を目的に当科を受診した。

症状および経過：欠損2年程度放置。欠損部陥